

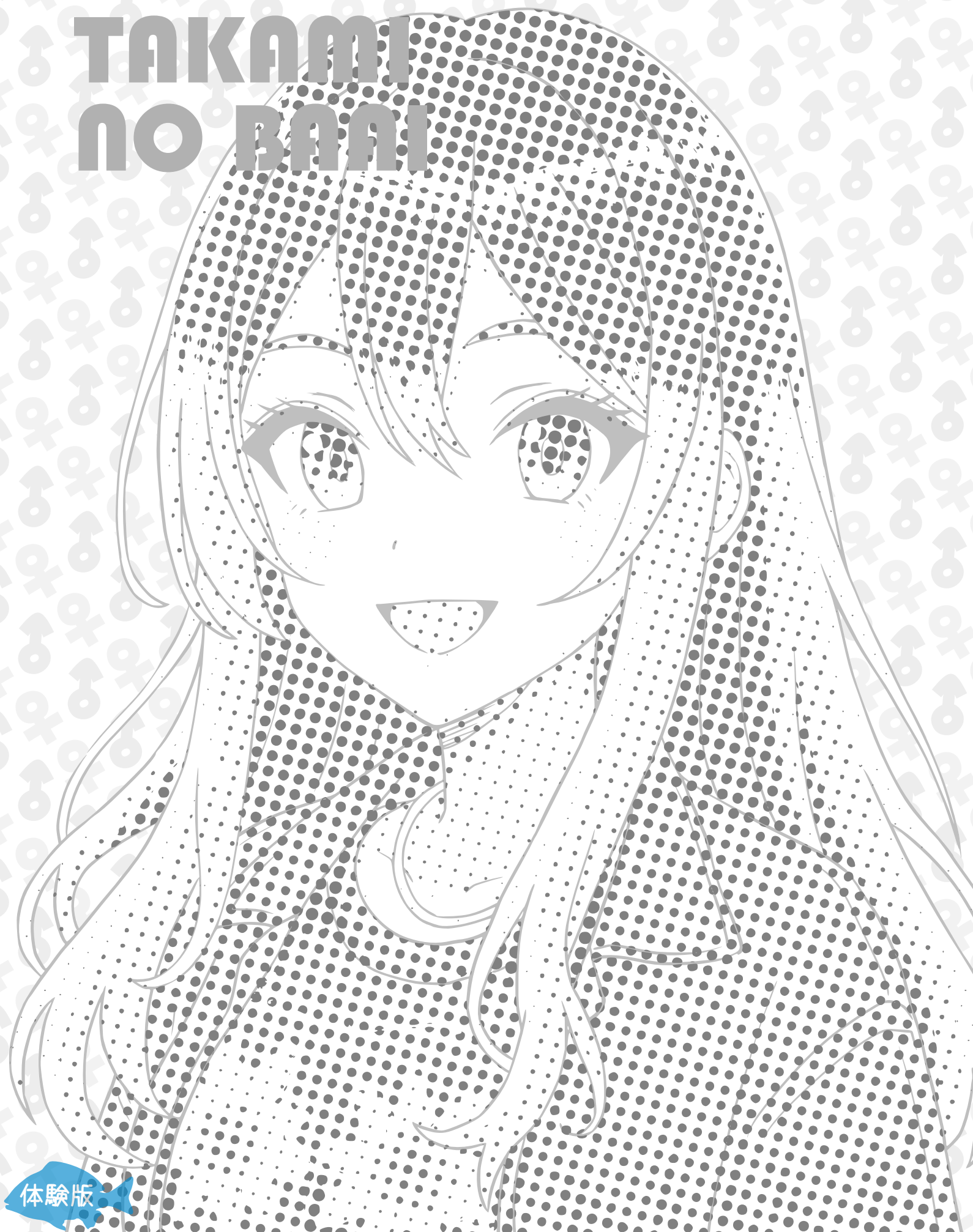
TSFで 孕み系



恋慕
年下・年上
幸せエンド

アイダ
タカミ
の場合

AIDA TAKAMI NO BAAI



目次

登場キャラクター	4ページ
第1章 協力プレイ	5ページ
第2章 店番の暇潰し	24ページ
第3章 神隠しの夜	48ページ
第4章 時間の迷路	66ページ
第5章 封印プレイ	75ページ
あとがき	83ページ
作品紹介	84ページ



登場キャラクター

■ 相田 貴義／貴美（アイダ タカヨシ／タカミ）

主人公。二十四歳。客の少ない生活雑貨屋を一人で切り盛りしている。
線が細く、どこか陰がある。友達は少ない。

■ 遠野 和樹（トオノ カズキ）

二十歳。区役所職員。地域振興課勤務。
元サッカー部。万年補欠だった。
三年前、主人公に告白して振られた過去を持つ。



第1章

協力プレイ



——俺は佐々木商店のレジの奥で、和樹かずきのペニスにまたがっている。

佐々木商店は、食料や生活用品をあつかう雑貨屋だ。店は港町を囲む山にある。昔は栄えた場所だったが今では空き家が多い。そのため客は少なく、日々の売り上げはわずかしかない。

俺、二十四歳の相田貴義あいだたかよしは、この雑貨屋を一人で切り盛りしている。俺は、この店のオーナーの子供ではない。頼みこんで働かせてもらっている部外者だ。店員をしているのは、過去の後悔をぬぐい去るためだ。

数日前までの俺は、レジカウンターの奥の椅子に座り、ぼうつと一日を過ごしていた。しかし今は違う。『Eゲーム』という謎のゲームを攻略している。

俺は相田貴美あいだたかみという女性になり、パンツを足首まで下ろしている。そして、椅子に腰かけた遠野和樹とおのかずきの上に座り、ペニスを膣に収めている。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『店番セックス』を達成しました。相田貴美は3ポイントを獲得しました！》

スマホから女性の声が響く。

俺はレジのカウンターに置いたスマホを確認する。画面には『Eゲーム』のチャレンジリストが表示されている。店番をしながらセックスをするという項目が消えて、新しい項目が追加された。俺は、和樹のペニスを挿入したまま、リストを確認する。

— 店番をしながら、中出しをする。5ポイント。

— 店番をしながら、おっぱいを出す。1ポイント。

— 店番をしながら、挿入三十分間。10ポイント。

俺はリストをじっとにらんだ。

「あの、俺は、これからどうすればいいんでしょうか？」

四つ年下の和樹が尋ねてくる。和樹は仕事の途中でスーツを着たままだ。ズボンのファスナーだけを下ろしてペニスを俺の中に入れていいる。

「三十分間、立たせ続ける」

「分かりました。三十分間ですね、って、けっこう長いですよ！」

「ちっ、使えない奴だな」

和樹のナニが、ふにゃふにゃになる。俺に愛の告白をしておきながら、萎えさせるとは何事だ。

「おまえ、もう少しがんばれよ」

「でも、貴美さん。朝から仕事をさぼって、ずっとセックスをしているんですよ」

「おまえ、協力プレイをしてくれると言ったよな。1万ポイントを手に入れるまで、付き合ってくれるって宣言したよな。あれは嘘か？ もし嘘なら、他の奴にチェンジするぞ」

「大丈夫です！ やらせてください！」

和樹は、泣きそうな声で返事をする。

「あの、貴美さん。おちんちんを立たせるために、おっぱいをもんでいいですか？」
和樹は、俺の服の下から手を入れながら尋ねてくる。和樹は俺が答える前からみはじめた。

膣に入ったペニスが大きくなる。俺は胸をもまれながら、うしろの和樹に話しかける。

「おまえ、おっぱい好きだよなあ。男のときの俺に告白してきたくせに」

「貴美さんに付いているから、さわっているんです。触感は気持ちいいですよ」

「俺は、なんだか変な気分になるよ」

実際、胸をもまれると、ふわふわした気分になる。

「服、上げていいですか？」

「いやいや、客が入ってきたらまずいだろう」

「でも、下半身は裸でおちんちんを入れていきますよ」

「客が来たら、さっきのように毛布をおまえの上にかける。これで客からは、ばれないから」

「いや、絶対にばれますよ。さっき、カップラーメンを買ったおばあさんの声、うわずつていましたし」

そうか、ばれていたのか。

自分の顔が赤くなるのが分かった。羞恥を感じると、ペニスを覆っている膣がきゅうつと締まった。

「貴美さん、締めすぎです」

「男だろ、我慢しろ」

「貴美さんは本当に暴君ですね。俺、好きにやりますよ」

和樹は、俺の服を上げておっぱいを露出させた。そして、両手で俺の腰をつかんで立ち上がった。

「ひっ」

俺は慌ててカウンターに手を突いた。おっぱいもお尻も露出した状態で、下半身を持ち上げられる。

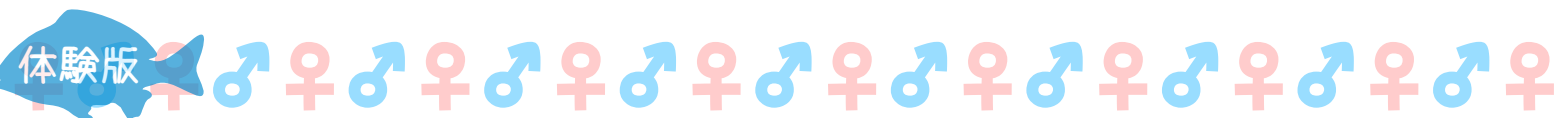
「こら、客が来たらどうするんだよ！」

「手早く済ませますから」

和樹は俺の腰をつかんだまま、自分の腰を前後する。ゆっくりした、ぎこちない動きだ。俺はイラッとする。手早く済ませるんじゃないのかよ。妙に遅い動きのせいで、お尻の辺りの感触が気になった。

ペニスが奥に入るたびに子宮口が小突かれる。それと同時に、和樹の腰に自分のお尻が密着する。

和樹は、スーツのファスナーだけを下ろしてペニスを出している。そのため突かれるたびに、ズボンのなめらかな生地にお尻が触れる。そのせいで自分だけが肌を露出しているのを意識させられる。



ってきた。

「うっ」

和樹が短く声を出して抱きついてきた。俺は、上から覆いかぶさられた状態で、中に精液をぶちまけられる。

下腹部に熱が広がる。白いネバネバした塊が注ぎこまれる。ひゅーひゅーと声にならない呼吸をする。全身に大量に汗をかいていた。おそらく汗のにおいが立ちのぼっている。和樹は俺の首筋に顔をうずめてにおいをかいでいた。

「ひゃっ」

カウンターに触れている胸を和樹がもんできた。余韻にひたっていたところに刺激を与えられて、声が出てしまった。

胸をもまれたことで収縮していた膣の入り口がゆるんだ。俺の下口は、鯉の口のように、ぱくぱくと動きながらペニスを愛撫している。ぼうつとしながら胸をもまれ続ける。しだいに体の熱が冷えてきたので、和樹に抜くように指示を出した。

「抜きます」

和樹がゆっくりと男性器を引き抜いた。だらしなく開いたままの膣口から精液が糸を引いて垂れる。物欲しそうに開いたままの入り口を閉じようとしたが駄目だった。何度か力をこめたら、だらりと精液がこぼれてようやく入り口が閉じてくれた。

「ふいてくれ」



カウンターに置いていたスマホから声が聞こえてくる。

「挿入三十分間の10ポイントをもらえなかった」

俺は和樹に恨みがましく言う。

「すみません」

「でもまあ、6ポイントもらえたから許す」

俺はすねたように声を出す。『Eゲーム』の画面を見た。チャレンジリストが更新されていた。

——店番をしながら、お掃除フェラ。2ポイント。

——口に精液を含んだまま接客。10ポイント。

——客の前でセックス。20ポイント。

挿入三十分間は消えていた。その代わりに、新しい項目が三つ増えていた。

「貴美さん、最後の一つはちょっと無理ですね」

画面をのぞきこんで和樹が言う。

「二つ目も無理だよ。しゃべったら、精液が口から漏れるだろうが」

ちらりと和樹の下半身を見た。スーツのズボンから、濡れたペニスが露出している。俺は髪をかき上げて股間に顔を近づけた。

「お掃除フェラ、してやるよ」

ペニスがわずかに持ち上がった。そのタイミングでぱくりとくわえて、舌で丹念になめ

取っていく。根元から順番に、陰茎、亀頭と掃除をしていき、愛液と精液を飲みこんでいった。

尿道口に残った白い粘液を吸い取る頃には、ふたたびペニスが勃起していた。

「おまえ、終わったんじゃねえのか？」

「口に精液を含んだまま接客しませんか？」

「はああ？」

怒りを含んだ声を返す。和樹が俺の頭を両手でつかみ、口の中にペニスをねじこんできた。今射精したばかりなのに、そんなに連続して精液は出ないだろうが。しかし和樹は諦める気はないらしい。

仕方がない。少し相手をしてやるか。

こいつがサカっているのは俺の責任でもある。『Eゲーム』のポイントを稼ぐために、チャレンジリストを次々にこなしている。矢継ぎ早の変態プレイを続けたら、歯止めが利かなくなるのも理解できる。

俺は数日前のことを思い出す。

店番で暇を持て余しているときに、ダイレクトメールが届いた。そこに書いてあった『Eゲーム』をインストールしたことで全てがはじまった。俺の体は女になり、チャレンジリストをこなすとポイントが入った。

重要なのは、一万ポイント集めると願いを一つ叶えると書いてあったことだ。



— 15 —

老婆はレジのカウンターに洗剤の箱を置いた。値段は覚えている。出されたお金のお釣りを計算してトレイの上に硬貨を置いた。

「あら、遠野くんもいたの？」

カウンターの途中で身を縮めていた和樹に、老婆は気づいたようだ。

「はは、ちょっと寄りまして」

和樹は立ち上がり、へらへらとした表情を見せる。老婆と和樹が長話をはじめそうだったので俺は警戒した。口に精液を含んだままだと、いつこぼしてしまうか分からない。

老婆に見えないように和樹を軽く蹴って、黙れと威圧の目を送る。和樹はカウンターの外に行き、老婆を店の外に連れ出した。

俺はスマホの画面を確認する。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『口内精液接客』を達成しました。相田貴美は10ポイントを獲得しました！》

ポップアップダイアログに、チャレンジクリアの文面が表示されていた。

もう口に含んでいなくても構わないよな。俺は喉をぐくりと鳴らして飲みこんだ。

「うへえ」

喉ごし最悪だった。味もまずい。うがいをして、口の中をきれいにしたかった。

パンツを上げて、しわくちゃんになったスカートを伸ばした。床には精液と愛液が混ざったものが落ちている。あとで掃除しないと。それよりもまずは、うがいだ。

俺はレジを離れて、居住スペースの台所に移動する。コップに水を入れて口をゆすいでシンクに吐き出した。口内のザーメンの感覚は残っているが、だいぶすっきりした。

「おばあさん、外まで送ってきました」

和樹が台所に入ってきた。

「店番、誰もいないぞ」

「閉店のプレートを、表にかけてきました」

「おまえなあ、勝手に」

和樹が唇を重ねてきた。いやな気はしなかったもので、されるにまかせた。

「俺、貴美さんが——貴義さんが、男でも女でも好きです」

「知っているよ。三年前に、おまえが高校生の頃に告白されたからな」

「その時は、未成年だから、そして同性だからと振られました」

「責任ある大人の対応だよ。それに俺は異性愛者だからな」

「今、俺は成年です。そして俺と貴美さんの性別は異なります。だから異性愛者の貴美さんにとって、俺と付き合うことは問題ないはずです」

「うーん、俺は、女の方が好きだという意味で言ったんだがな」

俺はコップに水を注いで一杯飲んだ。和樹は目をそらさない。引き下がる気はなさそう
だ。

「俺は四歳年上だしな」

「年齢差は、年を取れば気にならなくなります」

「そもそも恋愛の対象ではないしな」

「でも、セックスをするってことは、嫌いじゃないんですよ」

面倒だな。そう思うとともに罪悪感を覚える。

四歳差って、俺と柚子^{ゆず}ねえとの年齢差と同じなんだよな。年上の相手に恋心を抱く気持ちには、俺にも経験がある。

「結婚してください」

「嫌だよ。それよりも、チャレンジリスト、どうなっているかな。確認しねえとな」

「スマホ、持ってきました」

俺はコップをシンクに置いて、和樹からスマホを受け取る。画面を確認するとリストが更新されていた。

——濃厚なキス。1ポイント。

——仕事をさぼって一時間セックス。5ポイント。

——妊娠。5000ポイント。

最後の項目を見た瞬間、顔が赤くなり、耳まで熱くなった。和樹が結婚を迫ってきた理由が分かった。俺は、指で首元の髪の毛をかき上げる。空気を入れて熱を逃がしたかった。「この体、妊娠するのかわよ」

アプリで無理矢理女性にされた。形だけの変化だと思っていた。受精、妊娠、出産、そ

うした先のことは考えていなかった。

「ちまちまとポイントをためても、1万ポイントなんて届かないですよ。俺、貴美さんを妊娠させます。そのあとの責任は取ります」

和樹は、俺の腰に左手を回して抱き寄せた。そして唇を重ねて舌を入れてきた。

俺は和樹の接吻を受け入れて舌をからめた。男の太い舌と、女の細い舌。二つの肉の塊が、たがいを求めて混じりあう。

自分の意思とは関係なく、体が火照っていくのが分かる。じわりと汗をかき、女のおいを立ちのぼらせる。股間は湿り気を帯び、ふたたび充血しはじめる。

しばらく唾液を交換したあと、ゆっくりと唇を離れた。

「俺を、自分の女にする気か？」

「性別なんてどうでもいいんです。貴美さんと交わりたいんです」

「おまえ、エッチだな」

「そんなトコ顔をしている人に言われても」

「ああん？ 俺、そんなにエッチな顔をしているのか？」

「しています」

俺は恥ずかしさを隠すために横を向く。

「仕事をさぼって一時間セックス。好きなだけ中に出せ」

「それじゃあ——」

「もろもろは、妊娠したら考えてやるよ」

「がんばります」

「ひあっ！」

俺は和樹に抱きかかえられた。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

男の頃の体だと、こんなことはできなかった。俺は自分の体が女であることを自覚する。階段をのぼり、二階の寝室へと運ばれながら軽くキスをされた。俺は拒絶せずに身をまかせた。

ベッドの上に横たえられた。和樹はスーツを脱ぎ、裸になる。万年補欠だったとはいえ、高校のサッカー部で鍛えていた体は筋肉質だった。

俺がぐったりしていると、パンツを脱がされた。そして服を上げて、おっぱいを露出させられた。そのまま俺とセックスをしようとしてきたので、いったん止めさせた。

「きちんと、服を脱がせろよバカ」

「じゃあ、裸にします」

スカートを脱がされ、服をはぎ取られた。ブラジャーも取り除かれ、一糸まとわぬ姿になった。

「貴美さん、肌、きれいですよね」

和樹は、俺の胸から腹にかけて指先を這わせる。その指の動きに合わせて、ぞくぞくとした快感が走る。

女性体になってから数日しか経っていない。昔から女性だった人と違い、体に傷や劣化はなにもない。赤ん坊の頃から温室で育てたような無垢な美しさのままだ。

和樹は、おへその辺りにキスをする。何度もキスをしながら、下腹部や太ももに刺激を加えていく。もどかしかった。軽すぎる刺激でじらされている。苦情を言おうとしたら、愛撫は胸に移った。軽くもみ、乳輪の辺りにキスの雨を降らせる。乳首にだけは触れない。そのせいで、刺激を求めた乳首が限界まで膨らんでいく。

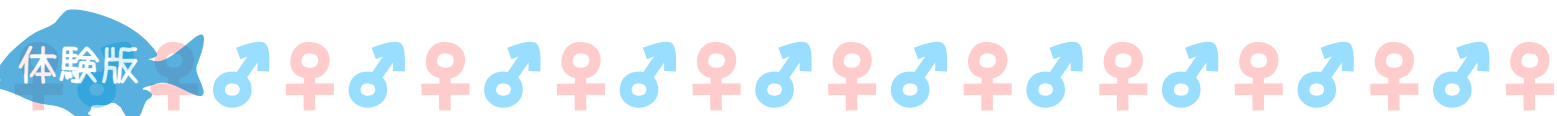
爪の先で、軽く乳首をこすられた。反応しようとする、その反応を抑えこむように乳首全体をつままれる。全身が反応して丸くなる。

ふたたび、へその辺りのキスに戻った。和樹は、軽い刺激から愛撫をやり直す。頭がぼうつとしている。どれぐらいの時間、前戯をされているのか分からなくなってきた。

腰に両手がかかり、ぬるりとペニスが入ってきた。あまりにも自然な挿入に、体が完全に脱力しているのが分かった。

とんとんと、一定のリズムで腰が打ち付けられる。その動きに合わせて、自分の口から喘ぎ声が漏れる。

汗を大量にかいていた。まき散らすほど愛液を流していた。目からは涙がにじんでいる。口からはよだれが漏れている。全身からさまざまな液体を垂れ流している。自分の体が、ローションをたっぷり染みこませた、シリコンの筒になっている気がする。



そろ仕事に戻れ」

「貴美さんと離れたくないです」

俺はため息を吐いて頭をかく。

「おまえ、子供か？」

「貴美さんよりは子供ですよ」

「いいから仕事に行け」

「結婚してくれますか？」

「しねえよ。でもまあ、今日の夜、仕事が終わったら相手をしてやる」

「分かりました。がんばって貴美さんを妊娠させます」

「バカ」

俺は、ポカリと和樹の肩を叩く。それから二人でもぞもぞと動き出して、べとべとになったがいの性器をきれいにした。そしてシャワーを浴びて、汗とおいを体から落とした。



第2章

店番の暇潰し



——時間は少しさかのぼる。

四月になった。佐々木商店の店員になって、六年が経過した。家業を継いだというわけではない。俺の名前は相田で、佐々木家の一員ではない。

佐々木商店は、生活用品を売る小さな雑貨屋だ。客は日に数人しか来ない。繁華街からは遠く、周りの家の多くが空き家になっている。

「マジで暇だな」

レジのあるカウンターの中で、俺はぼやいた。

この店と家を維持しておきたい。そうしたい思いで、地元出身の俺は、頭を下げて店員になった。しかし、そろそろ限界が来ている。

店は、二階建ての一階の一部を利用したものだ。土地と建物は、俺が佐々木おばさんと呼ぶ、佐々木芙美子の所有物だ。借家ではないから急に潰れることはない。問題は、俺の給料に充てるほどの儲けがほとんどないことだった。

掃除と仕入れだけは行き届かせて、店番を続けている。客の来ない時間は、スマホでネットを見て時間をつぶしている。

ピコン！

メールが届いた。仕入れ先からの新商品のお知らせかなと思い確認する。ゲームのダイレクトメールだった。なんだよ。こっちは課金しようにも金がねえんだよ。そう思いながらもいちおう読んだ。無料の範囲内なら、暇潰しになるかと思ったからだ。



だ。まあ、いい。誰か客が来るまで進めてみよう。スタートボタンを押すとダイアログが表示された。

——このゲームを開始すると、めくるめく性愛の日々がはじまります。ゲームではチャレンジが表示され、あなたがクリアすればポイントがたまります。10000ポイントをためると、願いが一つ叶います。本当にゲームをはじめますか。

——はい／いいえ

俺は「はい」のボタンを押す。その瞬間、スマホの画面が闇に染まった。暗黒の井戸を思わせる暗い空間が、スマホの画面の上に浮かんだ。

一瞬、世界から光が消えた。完全な闇の中で、俺の体がほのかに光っている。光の輪郭がぐにやりとゆがんだ。自分の体が分解されて再構成されたような気がした。

気がつくと、先ほどと同じようにスマホをのぞきこんでいた。今見た光景は幻だったのか。あまりにも暇すぎるから、ぼうつとしていたのか。俺は気を取り直して、画面に表示されている内容を確認した。

一番上にキャラクター情報と書いてある。最初情報は名前だ。相田貴美／アイダタカミになっている。自分の名前を一文字変えたキャラクター名だ。端末から情報でも読み取ったのだろう。

性別は女性になっている。ちょっとエッチなゲームと書いてあったが、女の子になりきって遊ぶのか？ どこかに、名前や性別を変える設定があるのかもしれない。あとで調べ

てみようと思った。

「他には、なにがあるんだ？」

体力35、知力40、性欲50、後悔100。

俺は一瞬、目の動きを止めた。なぜ後悔なんていうパラメーターがあるんだ？

パラメーターの最後にはポイントという項目があった。

— 0 / 10000

現在ゼロのこの値を、一万まで上げるのがこのゲームの目的だ。

項目と数値が並んだリストの下に「チャレンジリスト」というボタンがあった。これを押して、チャレンジをこなしていけばポイントが入るんだな。RPGのクエストみたいなものかと思う。

ボタンを押すと画面が変わり、リストが表示された。

— 鏡を見る。1ポイント。

— 胸をもむ。2ポイント。

— 股間をさわる。3ポイント。

俺は画面を見渡す。なにかキャラクターが出て操作するのではないのか。もしかして自分でやれというのか。

「えー、マジかよ」

テキストの指示があるだけのゲームなのか？ さすがに手抜きすぎだろうと思い、スマ

ホをカウンターの上に放り出した。

「はあっ」

やっぱり暇だ。

暇潰しのためにインストールしたゲームなんだから、少しぐらいはプレイしてやるか。

「ええと。鏡を見れば1ポイントなんだな」

俺はカウンターの下の引き出しを開けて、手鏡を探して自分の顔を見た。そこには、俺の顔とは異なる顔が映っていた。

小さな頭、華奢なあご、目は大きく、まつげが長かった。髪の毛は肩よりも長くなっている。首は細くなり、肩幅は狭くなり、胸は豊かに膨らんでいた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『鏡確認』を達成しました。相田貴美は1ポイントを獲得しました！》

カウンターのの上に置いたスマホから、大きな声が流れてきて俺は驚いた。

えっ、いったいどうなっているんだ？ 俺が女になっている？ そして鏡を見たらポイントが入った？

これは魔法なのか、それとも宇宙人や異世界人のテクノロジーなのか。少なくとも、現在の地球の技術では、こうした現象を引き起こすことはできない。

「いちおう、他のも試してみるか。胸をもむと、股間をさわるだな」

俺は胸をもみ、股間をさわった。胸には大きなおっぱいがあり、股間には男性の棒と球

がなかった。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『胸もみ』を達成しました。相田貴美は2ポイントを獲得しました！》

《コングラチュレーション！ チャレンジ『股間さわり』を達成しました。相田貴美は3ポイントを獲得しました！》

顔を上げて周囲を見回す。誰かが監視しているのではないかと思ったが、周囲には誰もいない。あるいは隠しカメラが仕掛けられているのかもしれないが、いたずらにしては手がこみすぎている。

いずれにしても、自分の姿が女になったことは説明が付かない。

チャレンジリストの画面が変わった。クリアしたチャレンジが消えて、新しいチャレンジが現れる。

——二番目に来た客の手を握る。3ポイント。

——二番目に来た客とキスをする。10ポイント。

——二番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20ポイント。

「いやいや、ちょっと待て。いきなりハードルが上がらまくりだろう！」

俺は髪をかき上げて頭をかいた。この調子で一万ポイントを稼ぐなんて無理だろう。アンインストールするかと思う、ホーム画面に戻り、操作をしようとする。

「あれ、できないぞ」



「ええ、そうなんです。あの、俺の——私の姿、どう見えますか？」
他人の目にどう映っているのか知りたくて尋ねた。

「どうって、服はちょっとぶかぶかすぎない？ 若い人の服のことはよく分からないけど、
そういうの流行っているの？」

「男に見えますか、女に見えますか？」

まどろっこしいので、ストレートに聞いた。

「男装？ しているのかもしれないけど、髪も長いし、体付きも分かるし、女性にしか見えないけど」

やはり、俺の姿は女性になっているのだ。

田中のおばあさんは、ちょっと大丈夫かしらという顔をしたあと、ブツブツと言いながら食料品をいくつか買って店をあとにした。

俺はチャレンジリストをふたたび確認する。「二番目に来た客」と書いていた理由が分かった。一番目に来た客に、自分の性別が本当に変わったかを確認させて、その自覚の上で行動させるためだ。

俺はチャレンジリストをじっと見る。

——二番目に来た客の手を握る。3ポイント。

——二番目に来た客とキスをする。10ポイント。

——二番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20ポイント。



「あの、女性の方に聞くのはおかしいことなのですが……、えーと、こういうことは絶対
にないことだと理解しているのですが……、もしかして、あなたは貴義さんですか？ 相
田貴義さん。……女性の方が貴義さんなわけではないのですが」
悩むように和樹は聞いてきた。

「マジかよ」

俺は思わず声を漏らす。和樹は、ほっとした顔をしたあと、心配そうな表情に変わった。
「本当に貴義さんなんですね？」

「そうだ」

「どうして、女性の姿に？」

俺は経緯を説明した。和樹は黙って俺の話聞いた。

「戻り方は分かるんですか？」

当然の質問だ。ふつうなら、この異常な状況からの脱却を願う。

「一万ポイントを集めると願いが一つ叶うそうだ。それで戻ることが可能なんだろう。だ
が、俺は他の願いを叶えたい」

俺は唇を噛む。自分がバカなことを言っている自覚はある。俺は和樹の反応を待った。

「俺に、なにができますか？」

和樹が真剣な顔で尋ねてきた。俺は驚いて和樹の顔を見上げた。

「俺、三年前にも言いましたよね。貴義さんのことが好きだって。性別や見た目なんか関

係ありません。俺は貴義さんの力になりたいんです」

「どうして、そんな」

どう考えてもおかしいだろうと思ひ尋ねる。

「中学三年生のとき、サッカー部でレギュラーが取れず、落ち込んでいた俺を励ましてくれましたよね。あのときから、貴義さんのことが好きなんです」

和樹が十四歳の頃のことだ。三年間レギュラーになれず、部活の仲間と顔を合わせたくなかった和樹は、下校ルートを変えてこの店に来た。そのとき俺は、この店で働きはじめてばかりだった。

十四歳という年齢を聞いて無視できなかった。親身になって話を聞いてやり、和樹の感情に寄り添った。それ以来、和樹は俺になつき、高校二年生のときに、付き合っ
て欲しいと俺に告白してきた。

俺の頭に一つのアイデアが浮かぶ。和樹の感情を利用して、俺の願いを叶えるための手伝いをさせればいいのではないか。

俺は右手を差し出す。

「俺の手を握ってくれ」

「手ですか？ 分かりました」

和樹は俺の手をしつかりと握った。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『手を握る』を達成しました。相田貴美は3ポ



が感じられる。唇が重なった。他人の肌と触れあっていることを実感する。静かな時の中で、たがいの体温を感じあった。

どれぐらい長いあいだ唇を重ねていただろう。あごに手を添えたまま、和樹が顔を引いた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『キス』を達成しました。相田貴美は10ポイントを獲得しました！》

スマホから音声が流れる。俺は慌てて、あごに添えられた和樹の手から体を引いた。和樹だけでなく、俺もファーストキスだった。

「おっ、10ポイント獲得できた。どうやって感知しているのか分からないんだよな、このアプリ」

俺はスマホに手を伸ばして、わざと明るい声を出した。

チャレンジリストは二つ消えた。その代わりに新しい項目が追加された。

——二番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20ポイント。

——セフレとディープキスをする。5ポイント。

——セフレとセックスをする。100ポイント。

なにがなんでも、セフレと言わせようという強い意志を感じる。

俺と和樹のあいだには淫靡な空気が漂っている。レジのカウンターだけが、男と女の距離を遮っている。

「あのな、和樹」

「なんですか、貴美さん？」

「俺をセフレにしてくれ」

心臓が爆音で鳴っている。目の前の和樹は、耳まで真っ赤になっている。たがいの心臓の音で、店内が埋まっているようだった。

さすがにまずかったかもと反省をはじめた。

「なあ、和樹……」

「俺は、貴美さんの恋人になりたいです。セフレではなく恋人に。でも、貴美さんが一万ポイントをためて願いを叶えるのに必要なら、どんな立場でもいいです。協力させてください」

《コングラチュレーション！ チャレンジ『セフレ発言』を達成しました。相田貴美は20ポイントを獲得しました！》

スマホの音が、どこか遠くで響いているように感じた。

俺はチャレンジリストをちらりと見る。セフレ発言が消えて、残り二個になっている。全てクリアするまで先には進めないのかもしれない。

俺はあごを上げて目をつむる。

「ディープキスをしてくれ。どんなのか分からないが、舌を入れたりするんだよね？」

俺は濃厚な接吻を求めた。

頬を両手で覆われた。和樹が唇を重ねてきた。先ほどのような軽い触れあいではない。たがいに口を開いて、濃厚に舌をからめあう。まだ、二人ともぎこちなかった。和樹は、優しく俺の舌をなめてくれた。目をつむったまま俺も応える。軟体動物の交尾のように舌同士を這わせ、唾液を交換した。

俺は、そっと目を開いた。和樹は目を閉じていた。俺はふたたび目をつむり、和樹とのキスを継続した。

長い時間を経たあと、俺たちはたがいから離れた。なんとなく気まずくなり、髪をかき上げてそっぽを向いた。

「貴美さん、その癖、女性になっても変わらないんですね」

「は？ なんの癖だよ」

「気まずくなったり、恥ずかしくなったりすると、髪をかき上げるじゃないですか」

「えっ？」

気づいていなかった。羞恥で顔を真っ赤に染めながら髪をいじり続けた。

「次はなんですか？ 俺、とことん付き合いますよ」

和樹が照れくさそうに言った。

俺は自分の顔を右手で隠して、スマホの画面を和樹に向けた。そこには、最後に残ったチャレンジが表示されている。俺は顔を隠したまま、そのチャレンジの内容を口にした。

「セフレとセックスをする。100ポイント」



— 40 —

二人とも、動きがぎくしゃくしている。靴を脱ぎ、一階の居住スペースに上がり、階段へと向かった。

六年前、住み込みで働きはじめたときに、部屋を一つ借りた。商店のオーナーである佐々木おばさんが入院してからは、この家全体を使っている。

俺が先導して階段をのぼる。和樹は何度も店に来ているが、二階に上げたことはない。階段がきしむたびに、和樹が付いてきていることを意識する。和樹は、俺の姿を下から見上げている。大きくなった臀部が、ちようと和樹の顔辺りにあるはずだ。恥ずかしさで、体温が二、三度上昇したのではないかと思った。

「こ、ここが俺の部屋だ」

扉の前で和樹に紹介する。一万ポイントを稼ぐためのチャレンジが、性的な内容ばかりなら、これからこの部屋で多くの時間を過ごすことになるだろう。

ドアノブを回して中に入る。殺風景な部屋には荷物がほとんどない。なにかを買って楽しむ気にはなれなかった。そうした人生を享受できなかった人がいるからだ。

「この部屋は、空き部屋だったんですか？」

俺が居候だと知っている和樹が尋ねてくる。

「ああ、柚子ねえの荷物置き場だった。俺が住み込みをすることになって空けてくれたんだ」

「柚子さんって、十年前の」

俺は和樹に視線を向けた。無言の圧を感じたのだろう、和樹は口を閉じた。

俺は上半身の服を脱ぎ捨て、ズボンとパンツも下ろして裸になった。

「なんだよ、じろじろと見て」

「きれいですね」

「お、おう」

俺は髪の毛を指でかき上げた。そして、ちらりと和樹を見て、「おまえも脱げよ」と、うながした。

和樹はスーツをていねいに脱いで裸になった。中学、高校と運動部だったため、体は筋肉質だった。

「おまえ、勃起しているじゃないか」

「俺の恋愛対象は、男性ってわけではないですから」

「じゃあ、なぜ俺に告白を？」

「好きな相手に性別なんて関係ないじゃないですか」

和樹はゆっくりと裸の肌を重ねてきた。立ったまま、たがいの体を抱き締める。

俺はベッドの上に寝かされた。そしてぎこちなく下半身を愛撫された。

最初はくすぐったかったが、しだいに気持ちよくなってきた。指が股間の一点に触れるたびに、思わず声が漏れた。

「貴美さん、クリトリスに触れるたびに声を出している」

和樹に言われて、それが女性の陰核なのだと気づく。

「濡れているのか？」

「指、見ます？」

顔の前に出されて、両手で触れて確かめる。ぬるぬるしている。ゆっくりと指を離すと糸を引いた。

「これが、愛液ってやつか」

「そうだと思います。もう入れますか？」

「ああ。……それで、痛いのかな？」

「分かりません。俺には経験がないですから」

「そりゃあ、そうだよな」

たがいになんか笑ったら緊張が解けた。和樹が俺の女性器に亀頭を当てる。熱を帯びたものが触れたのが分かった。何度かペニスを上下させたあと、わずかに先端が奥へと押しこまれた。膣の入り口を見つけたのだろう。

どれぐらい痛いのだろうかと思っていたが、わずかな痛みしかなかった。個人差があるのだろうか。その一瞬の痛みもすぐに消えた。

下腹部では、異物感と快感がないまぜになっていた。

ゆっくりと挿入して引き抜かれるたびに、神経のひだをなでられているようだった。へその下に両手を添えて目をつむる。入り口から奥までの様子を想像する。



「はあぁっ、はあぁっ」

酸素を取り入れようとして大きく息をする。和樹がお尻をなでてきた。なんでセックスのあいだではなく、終わってからなでるんだよと思った。

「尻が好きなのか？」

「いや、もちもちで、すべすべで、なでてみたくなったので」

「なんだよそれ」

くすくすと笑い声を漏らした。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『セックス』を達成しました。相田貴美は10ポイントを獲得しました！》

ベッドに置いたスマホから声が聞こえてきた。短い時間でいろいろとしたが、一万ポイントにはほど遠い。だが人間の性別を一瞬で変えられるアプリだ。俺の願いを叶える力もきっとあるはずだ。

「貴美さん。叶えたい願ってなんですか？」

俺の協力者になってくれた和樹が、遠慮がちに聞いてきた。

俺はしばらく無言で和樹を抱き締める。膣内に、精液とペニスを入れたまま考える。

「そのうち言うかもしれない。俺の心の整理が付いたらな」

「分かりました。そのときまで待ちます」

和樹は俺に優しくかった。その優しさがトゲとなり、俺の心にチクリと刺さった。

「全部のチャレンジリストをクリアしたから、新しいチャレンジが追加されたんじゃないですか？」

「そうだな」

俺は手を伸ばして画面を見る。タイトル画面に戻っていた。あるいは今まではチュートリアルモードだったのかもしれない。ここからが本番なのだろう。

タイトル画面の「E」の文字の上に、数文字の単語が追加されていた。

—— E s t r u s

「知っているか、この単語？」

俺は和樹に画面を見せた。

「発情期だったと思います」

「おまえ、よく知っているなあ。辞書のエロい単語に、赤線とか引いていたタイプか？」
恥ずかしそうに和樹はうなずいた。

「マジかよ」

冗談で言ったのだが、本当だったとは。

「それにしても——」

発情期ゲームか。ちよつとエッチなゲームという触れ込みだったが、こいつはガッツリ性交させるのが目的じゃねえかよ。

「どうしたんですか、貴美さん？」

「うん？ ああ、そろそろ抜いてくれないか？」
「すみません」

和樹はペニスを抜き、ベッドの周りを見渡してティッシュペーパーの箱を引き寄せる。
和樹は、俺の股をていねいにふいてくれた。

こうして、俺と和樹の『Eゲーム』生活は幕を開けた。



第3章

神隠しの夜

